

〔研究ノート〕

大学生の性格特性の変化 —約30年間のYG性格検査結果—

中 村 晃
相 良 陽一郎

〔問題と目的〕

現代社会において、若者の性格が変化してきていると指摘されることは多い。例えば川上(2013)は現代学生の心理的特徴として、自分のうちに葛藤を抱えることができず、身体化や行動化が生じやすいというメカニズムを見出している。また、葛藤を抱えることができないだけでなく、現代の密着した親子関係などによって、主体性が育ちにくく、修学や進路の課題を抱えやすいことを報告している。

実際に学生の性格が時代によってどのように変化してきているのかを検討するために、年度を追って同じ心理検査を行い、その検査結果がどのように推移しているかを調べる方法がある。例えば、小塩・岡田・茂垣・並川・脇田(2014)は日本人の自尊感情が、年齢や調査年によってどのように変遷しているかを検討するために、全サンプル48,927人に対して時間横断的メタ分析を行ったところ、中高生、大学生、成人期いずれも最近の調査になるほど自尊感情の得点が低下する傾向がみられること、特に近年では大学生において低下が著しいことを報告している。しかし、この研究では大規模にデータを集めているが、自尊感情のみに焦点をあてており、全体の性格傾向の変化までは検討されていない。

青年の性格の変化に関して質問紙調査を実施した研究もみられる。例えば、1992年、2002年、2012年と10年おきに青少年研究会が行った16歳から29歳の若者の調査では、友人関係においてはあっさりしてお互いに深入りしない若者が増加していることを報告している(藤村・浅野・羽瀧, 2016)。

また持主・柚木・藤田・舛田(2008)は若手社員の育成が大きな課題となりはじめた1997年から2007年までの11年間を対象にSPI・SPI2(Synthetic Personality Inventory 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ)のデータを用いて計68万人以上の21歳~23歳の性格特性の変化について検討した。その結果、神経質で周囲に敏感な傾向と不安を感じたり悲観的になりやすい傾向が継続して上昇していることを見出し、情緒的に不安定でストレスに弱くなってきていると報告している。

学生の性格の変化を、パーソナリティを包括的にとらえることができるYG性格検査(辻岡, 1957)を使用して行っている研究もある。YG性格検査はパーソナリティ検査として、日本では産業・教育・医療の各方面で最も広く使われている性格検査である(八木, 1989)。YG性格検査では12の因子(D:抑うつ性, C:気分の変化, I:劣等感, N:神経質さ, O:主観性, Co:協調性, Ag:攻撃性, G:活動性, R:のんきさ, T:思考的外向性, A:支配性, S:社会的外向性)の得点が算出される(Table 1)。また、清水・

山本 (2017) によると、YG 性格検査の12因子について改めて因子分析した結果、それぞれ情動不安定性 (D, C, I, N, O, Co), 主導性 (Ag, G, A, S), 非内省性 (R, T) の3因子が抽出されたことを報告している。

Table 1 YG 性格検査の性格因子

因子	因子名	因子の性質	低得点	高得点
D	抑うつ性	陰気、悲観的気分、罪悪感の強い性質	抑うつ性小	抑うつ性大
C	気分の変化	著しい気分の変化、驚きやすい性格	気分の変化小	気分の変化大
I	劣等感	自信の欠乏、自己過小評価、不適応感が強い	劣等感小	劣等感大
N	神経質さ	心配性、神経質、ノイローゼ気味	神経質でない	神経質
O	主観性	空想的、過敏性、主観性	客観的	主観的
Co	協調性	不満が多い、人を信用しない性質	協調的	非協調的
Ag	攻撃性	攻撃的、社会的活動性、強すぎると社会的不適応	攻撃的でない	攻撃的
G	活動性	活発な性質、身体を動かすことが好き	非活動的	活動的
R	のんきさ	気軽な、のんきな、活発、衝動的な性質	のんきでない	のんき
T	思考的外向性	非熟慮的、反省しない	思考的内向	思考的外向
A	支配性	社会的指導性、リーダーシップのある性質	服従的	支配性大
S	社会的外向性	対人的に外向的、社交的、社会的接触を好む傾向	社会的内向	社会的外向

八木 (1989) の表を筆者により一部改変

このYG性格検査を用いて学生の性格の変化を検討している例として、大江・加城・美田・新井 (2002) は1995年度から2000年度までの6年間に渡り、新入生計407名にYGテストを実施して入学年度別の集団特性を比較した。その結果、2000年度の入学生がそれ以前の学生と比較して抑うつ性をあらかずD因子、気分の変化をあらかずC因子、主観性をあらかずO因子が高いことが示された。

また中村 (2003) は、千葉商科大学における新入生の性格傾向の変化を、1986年、1994年、2002年と年代を追って、計4,666人に対してYG性格テストにより検討した。その結果、学生の性格傾向は変化してきており、情緒不安定因子の得点が上昇し、主導性と非内省性因子が減少する傾向がみられたことを報告している。

同様に、Kawamoto & Endo (2015) は、1981年から2010年にかけて、3,656名の中学生と高校生を対象に行ったYG性格検査の得点を分析した。その結果、生まれた年が後になるほど、情緒不安定因子が高く、主導性や非内省因子が低くなる傾向が見られたことを確認している。

以上の研究でみられるように、若者は一貫して感情面では敏感で情緒が不安定になりやすい方向に変化していることが報告されている。しかしこのような傾向は、現在までまだ続いているのかは、明らかになっていない。また、千葉商科大学ではこれまで新入生を対象にしたYG性格検査の蓄積がある。そのため、本研究では、千葉商科大学の学生の性格傾向が1980年代から現在 (2018年) にかけてどのように変化したかを、YG性格検査を用いて検討することを目的とした。実際に学生の性格傾向がどのように変化してきたか知ることは、学生に対してどのように教育するかを考えるうえで重要な参考資料になると考えられる。

〔方法〕

調査実施大学と調査対象者

この調査には、1986年度、2002年度、2018年度における、千葉商科大学商経学部1年生の、計2,390人の資料が用いられた（Table 2）。

Table 2 各年代別人数

年度	性別	商学科	経済学科	経営学科	合計人数 (%)	入学者数 (受検率%)
1986年度受検者	(男)	420	421	552	1,393 (97.1)	1,589 (87.7)
	(女)	19	13	9	41 (2.9)	45 (91.1)
	(計)	439	434	561	1,434 (100)	1,634 (87.8)
2002年度受検者	(男)	207	261	159	627 (82.5)	1,183 (53.0)
	(女)	61	22	50	133 (17.5)	222 (59.9)
	(計)	268	283	209	760 (100)	1,405 (54.1)
2018年度受検者	(男)	130	3	12	145 (74.0)	776 (18.7)
	(女)	45	0	6	51 (26.0)	174 (29.3)
	(計)	175	3	18	196 (100)	950 (20.6)
合計	(男)	757	685	723	2,165 (90.6)	3,548 (61.0)
	(女)	125	35	65	225 (9.4)	441 (51.0)
	(計)	882	720	788	2,390 (100)	3,989 (59.9)

(人)

1986年度受検者は、平均年齢18.5歳 ($SD=0.69$)、2002年度は、平均年齢18.4歳 ($SD=0.91$)、2018年度は、平均年齢18.4歳 ($SD=0.49$)、全体で平均年齢18.4歳 ($SD=0.77$)であった。また、1986年度は新入生がYG性格検査を受検するのが必須であったため入学者のほとんどが受検している。しかし、その後YG性格検査の受検が必須でなくなったため2002年度と2018年度は、一般教育科目である心理学の受講者を対象にYG性格検査を実施したため、受検率が低くなっている。

また分析対象者は、1986年、2002年、2018年の新入生に限定したが、これは大学が4年で1サイクルであることを考慮したため、16年間隔になっている。

調査内容

性格検査：YG（矢田部・ギルフォード）性格検査の一般用（日本心理テスト研究所株式会社発行）を用いた。YG性格検査は、検査時間が約30分と手軽に実施でき、日本で最も広く使われている性格検査である（八木，1989）。質問紙は120の質問項目から構成され、そこから12の因子（Table 1）の得点が算出され、さらにそれぞれの因子の得点パターンから、5つの性格類型に分類されるようになっている（Table 3）。

手続き

調査の実施方法は年度によって異なり、1986年度は、入学者全員に対しオリエンテーション期間中に性格検査を集団実施した。また、2002年度と2018年度では一般教育科目の心理学の授業内に性格検査を集団実施した。ただし受検は任意とし、回答を拒否したり

Table 3 YG 性格検査による類型

性格類型	特徴
A 類	平均型であり、目立った偏りがないタイプ
B 類	情緒的には不安定になりやすいが、積極性のあるタイプ
C 類	情緒的には安定しており、消極的なタイプ
D 類	情緒的にも安定し、積極的なタイプ
E 類	情緒的に不安定になりやすく、消極的なタイプ

八木 (1989) の表を筆者により一部改変

中断したりすることができること、および回答を拒否したり中断したりしても調査協力者に不利益は生じないことを説明した。

【結果】

(1) YG 性格検査における因子の得点の変化

年度ごとに YG 性格検査の 12 の因子における得点の平均値の差の検定を、分散分析によって行った。その結果、すべての因子の年代による主効果が有意であったため、LSD 法による多重比較で検討したところ、年々一貫して得点が増加している因子群 (D, C, N, O, Co) と、得点が減少している因子群 (Ag, A) が認められた (Table 4, Figure 1)。一方、I 得点 (劣等感) は 1986 年から 2002 年にかけては得点が増加したが、2002 年から 2018 年にかけては有意な変化は見られなかった。また、G (活動性)、T (思考的外向性)、S (社会的外向性) の得点は、1986 年から 2002 年にかけては減少したものの、2002 年から 2018 年にかけては有意な変化は見られなかった。R 得点 (衝動性) に関しては、1986 年から 2002 年にかけては有意な変化は見られなかったが、1986 年から 2018 年にかけては有意に値が減少した。ただし Figure 1 に見られるように、有意ではなかったものの、時間経過とともに I 得点は単純に増加し、G・R・T・S の各得点は単純に減少しており、大江ら (2002) による先行研究とほぼ一致する結果となった。

Table 4 各年度における YG 性格検査の因子の得点

因子	1986 年度	2002 年度	2018 年度	F	多重比較
D (抑うつ性)	8.6 (5.80)	10.6 (5.58)	11.8 (5.83)	45.7***	'86< '02< '18
C (気分の変化)	9.2 (4.81)	9.8 (4.56)	10.7 (4.94)	10.6***	'86< '02< '18
I (劣等感)	8.7 (5.21)	10.3 (5.25)	10.8 (5.56)	30.6***	'86< '02, '18
N (神経質さ)	9.3 (5.07)	10.7 (4.81)	11.9 (4.75)	34.3***	'86< '02< '18
O (主観性)	8.0 (4.18)	9.8 (4.09)	10.8 (4.44)	72.6***	'86< '02< '18
Co (協調性)	7.5 (3.82)	8.9 (4.07)	10.0 (4.21)	52.3***	'86< '02< '18
Ag (攻撃性)	10.6 (3.90)	9.9 (4.14)	9.2 (4.37)	15.8***	'86> '02> '18
G (活動性)	11.3 (4.27)	10.5 (4.68)	10.2 (4.31)	11.4***	'86> '02, '18
R (のんきさ)	12.1 (4.17)	11.7 (4.38)	11.3 (4.52)	3.58*	'86> '18
T (思考的外向)	10.1 (4.36)	8.8 (4.30)	8.3 (4.50)	32.3***	'86> '02, '18
A (支配性)	10.3 (4.57)	9.7 (4.65)	8.7 (4.37)	12.9***	'86> '02> '18
S (社会的外向)	13.2 (4.83)	11.1 (5.27)	10.6 (5.56)	51.9***	'86> '02, '18

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$, カッコ内は標準偏差

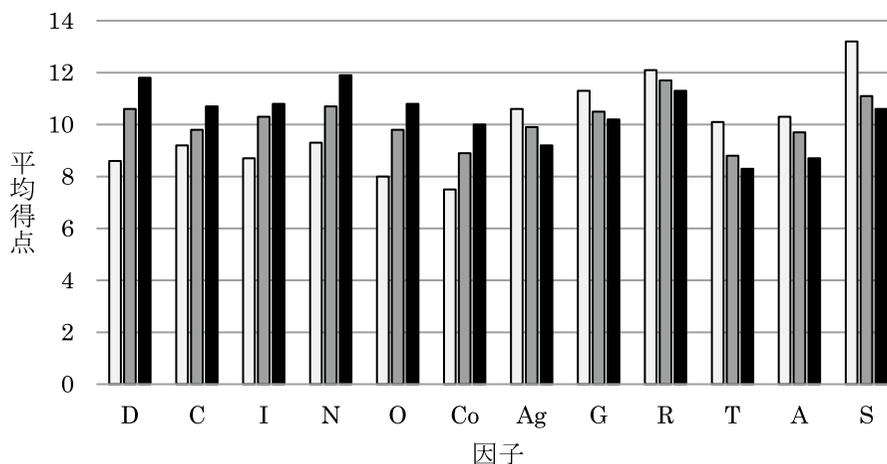


Figure 1 各年度における YG 性格検査の因子の得点

因子の中でも、特に D, C, I, N は情緒不安定性における集合因子とされているが（八木, 1989）、このうち D, C, N において一貫して得点の上昇がみられたことから、この 30 年で情緒が不安定で心配性になりやすく、敏感で気を遣う方向に大学生の性格が変化してきていることが示された。さらに、O 因子や Co 因子においても得点が上昇しているため、主観的で自己中心的になりやすく、対人不信感が強い人間関係が閉鎖的で警戒心が強くなっている傾向が認められた。

また、Ag 因子は攻撃性、A 因子は支配性を意味するが、これらの因子がともに一貫して減少していることから、大学生の性格がおとなしくて消極的な方向に変化していることが示された。

山本・清水（2010）によると、YG 性格検査の D, C, I, N, O, Co 因子は性格の 5 因子説（柏木, 1997）における情動性と関連が深く、Ag, G, R, A, S 因子は外向性因子と関連が深いことを報告している。つまり、1986 年から 2018 年度にかけて、性格の 5 因子説における情動性が高くなり、外向性が低くなる方向に変化してきていることが示唆された。

次に、YG 性格検査の因子のうち、D, C, I, N, O, Co 得点の合計点を情動不安定性得点とし、Ag, G, A, S 得点の合計点を主導性得点、R, T 得点の合計点を非内省性得点として算出し（清水・山本, 2017）、年度ごとの推移を検討した（Table 5）。その結果、一貫して情動不安定性得点が上昇し、主導性が減少していることが確認された。非内省性

Table 5 各年度における YG 性格検査の因子の得点

因子	1986 年度	2002 年度	2018 年度	F	多重比較
情緒不安定性	51.3 (24.0)	60.0 (22.2)	65.9 (24.9)	55.7***	'86 < '02 < '18
主導性	45.4 (13.9)	41.2 (14.3)	38.6 (14.4)	34.0***	'86 > '02 > '18
非内省性	22.2 (6.49)	20.5 (6.57)	19.7 (6.60)	25.0***	'86 > '02, '18

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$, カッコ内は標準偏差

に関しては、1986年から2002年にかけては減少しているが、2002年から2018年にかけては有意な差は見られなかった。しかし Table 5 に示されるように、有意ではなかったものの、時間経過とともに非内省性得点は単純に減少しており、Kawamoto & Endo (2015) による先行研究とほぼ一致する結果となった。以上の結果から、情緒不安定で主導性が低い方向に変化していることが示された。

(2) YG 性格検査における性格類型の変化

YG 性格検査では性格の12の因子の得点パターンから、最終的にA類、B類、C類、D類、E類の5つの性格類型に分類する。そのため、この性格類型の出現割合を年度別に χ^2 検定を用いて検討した。その結果、性格類型の割合が年度によって有意な差が認められた ($\chi^2(8) = 117.6, p < .001$)。残差分析の結果、B類やE類は増加しているが、D類が減少していることが示された (Table 6, Figure 2)。B類とE類は共通して情緒の不安定さを表し、D類は情緒が安定して活動的であることを示すため、積極的で情緒的に安定している大学生が減少し、大学生の性格が全体的に情緒が不安定な方向にシフトしていることが示唆された。

[考察]

本研究では、千葉商科大学商経学部の新入生の性格傾向が1980年代から現在にかけてどのように変化したかを、YG性格検査を用いて検討した。その結果、1986年、2002年、2018年と最近になるにつれて一貫して、情緒が不安定になりやすい方向、および主導性や積極性が減少する方向に変化していることが確認された。なお、劣等感・活動性・

Table 6 各年度における性格類型の出現比率

		1986年度	2002年度	2018年度	合計
A類	度数	303	180	35	518
	%	21.1%	23.7%	17.9%	21.7%
	調整済残差	-0.8	1.6	-1.4	
B類	度数	296	178	55	529
	%	20.6%	23.4%	28.1%	22.1%
	調整済残差	-2.2	1	2.1	
C類	度数	136	87	26	249
	%	9.5%	11.4%	13.3%	10.4%
	調整済残差	-1.8	1.1	1.4	
D類	度数	532	162	25	719
	%	37.1%	21.3%	12.8%	30.1%
	調整済残差	9.2	-6.4	-5.5	
E類	度数	167	153	55	375
	%	11.6%	20.1%	28.1%	15.7%
	調整済残差	-6.7	4.1	5.0	
合計	度数	1434	760	196	2390
	%	100%	100%	100%	100%

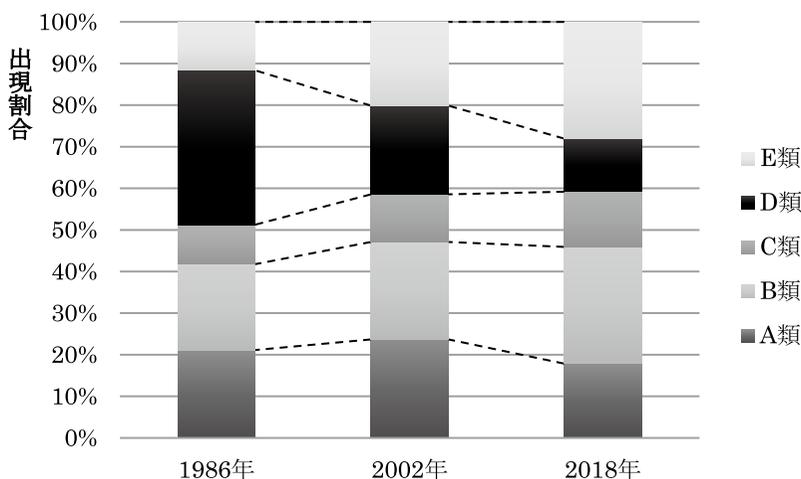


Figure 2 各年度における性格類型の出現比率

外向性については、直近の16年間（2002年から2018年）には大きな変化は見られなかったものの、1986年から2002年の間においては、劣等感が増加し、活動性と外向性が低下して内向的になる傾向がみられた。

近年若者の友人関係が希薄化していることが指摘されているが、田畑（2018）は希薄化しているのではなく、むしろある種の濃密化の傾向がみられると考えた方が適切であると述べている。関係の深浅に合わせ、それを壊さないための能力が求められるのもそのためであると述べている。そのためどの世代よりも関係に敏感で繊細になってきていることを報告している。つまり、現代の若者は対人関係を維持するためにこれまでより多くの気遣いが必要となり、そのことで相手の応答や反応に敏感になり、ささいなことで情緒が不安定になりやすくなっていることが考えられる。

また、川上（2013）は近年の大学生の特徴として、悩むということを通り越して、すぐに落ち込んだり、心身症や摂食障害などといった身体化を行ったりする傾向が強くなっていることを指摘している。この落ち込みやすさが、情緒の不安定性の上昇につながっていることが考えられる。また、川上は同様に、現代の大学生は、親子関係が密着しているため、学生自身の主体性が育ちにくい環境にあることを指摘している。その主体性の低さが、今回の調査における主導性の低下につながっていることが考えられる。

日本では1990年代以降一貫して自尊感情の得点が下降していることが報告されている（小塩ら，2014）。その原因の一つにバブル経済の崩壊といった社会経済状況が何らかの影響を与えていることが可能性としては考えられるが、Park, Twenge & Greenfield（2014）の研究では経済状況が悪化したとしても肯定的な自己観が失われるとは限らないことを示しているため、その原因を経済状況のみに求めるのは無理があると指摘している。今後、このような性格の変化がなぜ起きているのか、さらに原因を検討していく必要があるであろう。

劣等感に関しては、1986年から2002年にかけて得点が増加しているが2002年から2018年にかけては得点が増加しているもののその変化が有意ではなかった。その理由と

して3点ほど指摘しておきたい。第1点は、劣等感が他の性格特性とは異なる変化を示す可能性である。実際小塩ら(2014)は、大学生の自尊感情得点は2000年以降減少しつづけていることを報告しているが、自尊感情が低くなるにつれて劣等感が高くなることが考えられるのである。なお第2点としては、サンプル数の偏りをあげなくてはいけない。2018年の調査対象者数は1986年と比較して13%、2002年と比較して26%と少ない。そのため本来の母集団の差が有意差に至らなかった可能性がある。また第3点としては、サンプリングの問題も考えられる。1986年度は入学者全体に対してYG性格検査が行われていたが、2002年と2018年は心理学の授業を受けた学生のみが対象となったことから、サンプル数が少ないだけでなく、サンプリングの対象が異なっていた可能性が考えられる。つまり、心理学を履修している学生のみを対象にしているという点で、全入学者とは異なるサンプリングであり、それが結果に影響を与えていた可能性は否定できない。これらの問題については、今後さらなる検討が必要である。

また、G(活動性)、T(思考的外向性)、S(社会的外向性)の得点は、1986年から2002年にかけては減少したものの、2002年から2018年にかけては有意な変化は見られなかった。これらの因子はどれも外向性と関係するが、1986年から2002年にかけては大きく減少しているもののそれ以後の下げ幅は少ない。これはこの年代の若者全体の変化ではなく日本全体の大学進学率が上昇したことも関係がある可能性がある。1986年では大学進学率が23.6%であるのに対し、2002年では40.5%と大きく増加しているが、2018年では53.3%と上昇幅は少ない(文部科学省, 2019)。そのため、1986年では青年の中でも活動性や外向性が高く劣等感の低い者が大学に入学してきていたが、その後大学への進学率も上昇したために、そうでない若者も多く入学するようになった可能性が考えられる。

今回の調査対象者は千葉商科大学商経学部の新入生に限っているが、情緒が不安定になりやすい方向、および主導性や積極性が減少する方向に変化している傾向は現代の青年全体にみられる傾向と一致していると考えられる。実際、松田・名取・破田野(2019)が2001年から2011年にかけて関西の日本人大学生2,026名に対してYG性格検査を行った結果(Table 7)の値が、千葉商科大学で行った2002年と2018年に行った調査の結果の値の間にほとんどおさまっていた。そのため、千葉商科大学の学生の性格に特に偏りがみられたとは考えにくい。また、持主ら(2008)やKawamoto & Endo(2015)によって報告された性格傾向の変化とも一致している。

Table 7 松田ら(2019)の調査におけるYG性格検査12因子の平均得点(上段)と標準偏差(下段)

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
男性	11.5	10.0	9.9	11.7	10.4	9.6	10.6	10.2	11.8	8.1	9.2	10.7
	5.5	4.3	5.0	4.7	3.9	4.2	4.1	4.6	4.5	4.4	4.8	5.2
女性	13.0	11.1	10.6	11.8	11.3	8.0	10.5	9.9	12.0	8.7	10.1	12.3
	5.2	4.4	6.1	4.8	3.6	4.0	4.0	4.5	4.5	4.4	4.9	5.3

本研究では、千葉商科大学の新入生の性格傾向の変化を調べるため16年ごとにYG性格検査を実施することによって、近年になるほど情緒が不安定になりやすい傾向、および主体性が低下している傾向がみられることを示した。しかし、このことは必ずしもネガティ

ブな側面を表しているわけではない。八木（1989）も、どの因子にも高ければ高いなりの長所と短所があり、低ければ低いなりの長所と短所があると述べている。例えば、N因子が高いことは細かいことが気になるため不安定になり心配性になりやすい傾向がある反面、細かいことに気づくことができるため、他者に気遣いや配慮ができることにもつながる。現代の友人関係では、以前より関係の深さにあわせてそれを維持するために敏感さや繊細さが求められているが（田畑，2018）、このようなN因子が高いことが現代の友人関係を維持することにプラスに働いていることが考えられる。また、O因子やCo因子が高いことは対人不信感が強いことをあらわすが、現代のネット社会では安易に人を信用しないようにすることが大切になってきていると考えられるため、このことも現代の社会情勢を鑑みると適応的な側面をもつと考えられる。また、Ag因子とA因子が低くなっていることに関しては、リーダーシップをとらず消極的になってきていることをあらわすが、反面攻撃性が低い他者と協力したり穏やかに接したりすることができる長所にもなりうる。

以上述べたように、大学生のこのような変化に対して悪い変化とみなしがちであるが、それが社会的に意味のある変化である、という視点も大切であると考えられる。川上（2013）は学生相談や学生支援をするうえで、このような現代の学生における性格の変化を理解することが必要であると述べている。そのうえで学生の気持ちに共感していくことが重要であること、守られた空間でのグループ体験が学生の主体性を育む可能性があること、保護者も学生を支える人的資源であり協働者であるという認識を持って支援することが大切であることを指摘している。今後教育していくうえで、学生の性格傾向が変化していることを認識し、その変化を単にネガティブな面から捉えず、そのような学生の変化に沿ったやり方で教育や支援をしていくことが重要と考えられる。

〔参考文献〕

- 藤村正之・浅野智彦・羽瀨一代編（2016）. 現代若者の幸福：不安感社会を生きる 恒星社厚生閣
- 柏木 繁男（1997）. 性格の評価と表現：特性5因子論からのアプローチ 有斐閣
- 川上華代（2013）. 現代学生の特徴と学生相談についての一考察：問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から見えてくるもの 和光大学現代人間学部紀要, 6, 141-153.
- Kawamoto, T., & Endo, T. (2015). Personality change in adolescence: Results from a Japanese sample. *Journal of Research in Personality*, 57, 32-42.
- 松田博子・名取和幸・破田野智美（2019）. 色の好みとパーソナリティとの関係：色の感情的意味からの考察 日本色彩学会誌, 43, 69-80.
- 持主弓子・柚木さおり・藤田彩子・舂田博之（2008）. 大学生の過去10年の性格傾向変化 産業・組織心理学会第24回大会論文集, 49-52.
- 文部科学省（2019）. 文部科学統計要覧（平成31年版）
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1417059.htm 2020年8月24日閲覧
- 中村晃（2003）. 大学生の性格における年代的变化 千葉商大紀要, 41, 1-19.
- 大江基・加城 貴美子・美田誠二・新井健之（2002）. 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究（第5報）：矢田部ギルフォード性格検査による6年間の比較 川崎市立看

護短期大学紀要, 7, 37-43.

小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響: Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析 教育心理学研究, 62, 273-282.

Park, H., Twenge, J. M., & Greenfield, P. M. (2014). The great recession : Implications for adolescent values and behavior. *Social Psychology and Personality Science*, 5, 310-318.

清水和秋・山本理恵 (2017). YG 性格検査の因子の構造: 多集団同時分析による3次元構造の確認 関西大学社会学部紀要, 48, 1-25.

田畑和彦 (2018). 現代の若者の「つながり」志向 (2): 「希薄化」論の再考 静岡産業大学情報学部研究紀要, 20, 217-243.

辻岡美延 (1957). 矢田部ギルフォード性格検査 心理学評論, 1, 70-100.

八木俊夫 (1989). YG テストの診断マニュアル: 人事管理における性格検査の活用 日本心理技術研究所

山本理恵・清水和秋 (2010). Big Five と YG 性格検査の関係性の探索: Big Five 形容詞短縮版と YG のジョイント因子分析から 日本心理学会第74回大会発表論文集, 61.

(2020.9.9 受稿, 2020.11.4 受理)

〔抄 録〕

本研究では、千葉商科大学商経学部の新入生の性格傾向が1980年代から現在（2018年）にかけてどのように変化したかを、性格検査を用いて検討することを目的とした。調査の方法として、1986年度、2002年度、2018年度それぞれにおいて、千葉商科大学商経学部1年生の計2,390人に対し、YG（矢田部・ギルフォード）性格検査の一般用に対して回答を求めて、年代による性格傾向の差の分析を行った。

調査の結果、1986年、2002年、2018年と最近になるにつれて一貫して、敏感で情緒が不安定になりやすい方向、およびおとなしくて消極的な方向に学生の性格が変化していることが確認された。しかし、このような変化は必ずしもネガティブな側面を表しているわけではなく、現代社会に対して適応的な側面を持つと考えられる。今後教育していくうえで、学生の性格傾向がこのように変化していることを認識し、その変化を単にネガティブな面から捉えず、学生の変化に沿ったやり方で教育や支援をしていくことが重要と考えられる。